

英語のポライトネス

— negative politenessを中心に —

吉村 秀幸

0. はじめに

「ポライトネス」のテーマは、社会言語学あるいは語用論で多く扱われているが、単独の概念では捉えきれないことが明確になってきた。例えば、ポライトネスを「会話分析」を用いて捉えようとする試みもある。しかし、この小論では、ポライトネスは、ダイクシスを中心に据える必要性を強調するものである。そうすることで、別々の説明を与えられてきた現象も一般化できること余地があることを示すことである。つまりポライトネス、特に「ネガティブ・ポライトネス (negative politeness)」を、ダイクシスを中心にすえて捉える方法には、まだ分析の余地が残っていること、見逃している部分があることを示すことである。

具体的には、タイポロジーで、受動態などを説明するのに用いられる「主体の脱焦点化 (Agent-defocusing)」という考え方を応用して、「聞き手の脱焦点化 (Addressee-defocusing)」という概念を提案する。この概念とダイクシスという枠組みを使った分析で、ポライトネスに関わるさまざまな現象——「受け身」、「複数」、「非人称構文」、「代名詞」、「呼称」——を一般化できることを示す。また、「聞き手の脱焦点化」と「言霊思想」の関係といった普遍性についても探求する。

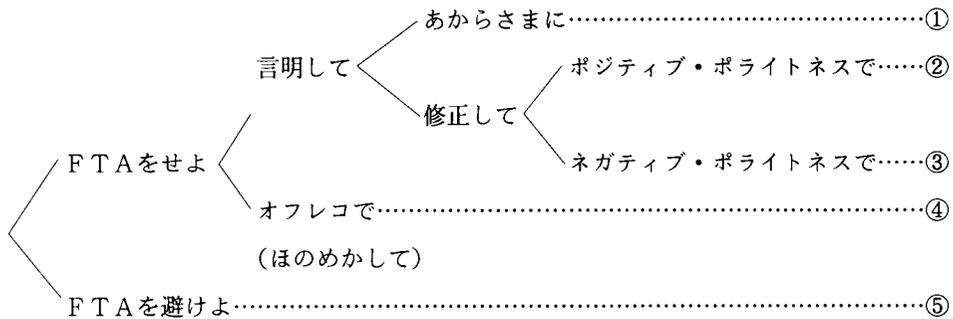
1. 2つのポライトネス

話し手が聞き手との心理的距離を調節するさまざまな行為を説明する必要性から、広く「ポライトネス (politeness)」という語に関連する様々な現象を捉えることが、現在では常識になっている。つまり日本語でいう「敬意」だけでなく、聞き手との距離を近いものにしようとする行為も「ポライトネス」と捉えている。日本語の「敬意」は、後述する「ポライトネス」の中でも、ほぼ「ネガティブ・ポライトネス (negative politeness)」に相当する。このような広い概念である「ポライトネス」を日本語の「敬意」という概念では網羅できない。¹⁾ この小論で扱うのは、話し手から聞き手に対するネガティブ・ポライトネスが中心であり、「ネガティブ・ポライトネス」という語をそのまま使うこととする。

Goffman (1967) によれば、人間は「フェース (面子) (face)」を持っていて、物のやりとりと同様に話し手・聞き手の間でやりとりが行うことができる。「フェース」には「積

極的なフェース (positive face)」と「否定的なフェース (negative face)」の2種類ある。前者は、周りの人たちに自分に対して関心を持ってもらいたい、仲間と思われたい、よく思われたいなどの「肯定的なフェース」である。もうひとつの「フェース」は、周りの人たちに自分の自由を干渉されたくない、自分の領域を侵害して欲しくないという「消極的なフェース」である。私たちはコミュニケーションを行う場合、必ず聞き手のフェースを脅かす行為を行なう可能性を持っている。このような行為を face-threatening act (以下 FTA) と呼ぶ。話し手が FTA を想起した場合に、以下の戦略の選択が考えられる。²⁾

(1)



まず表の①④⑤の場合である。①の場合は、Grice (1965) のいう「協調の原理 (Cooperative Principle)」に従い、効率の良いコミュニケーションが行われる。例えば、話し手が「聞き手の鉛筆を借りる」という FTA 行為を思いついたとしよう。あからさまに相手の鉛筆を取ったり、Lend me your pencil などと言語表現することになる。⑤の場合は、これは聞き手の領域に侵害することになるので、鉛筆を借りるという行動をあきらめる場合である。④の場合は、筆記用具が必要な態度を示したり、I have nothing to write with などのように言語による「ほのめかし」によって目的を達成しようとする場合である。

ポライトネスに関わる②の場合は、聞き手の「積極的なフェース」に向けた行為である。聞き手の仲間意識に訴え、領域に踏み込むことで、相手に親しく思って欲しい場合には、このような「ポジティブ・ポライトネス」を利用した戦略で FTA 行為を行うことになる。いわば、「なれなれしく」「きさく」に行動することにつながる。例えば、Let's get out of here, pal という言語表現では、inclusive 'you' や呼称 pal といった「ポジティブ・ポライトネス」のマーカ (標識) を用いている。英語圏で初対面でもすぐに、なれなれしく相手を First Name で呼ぶような例もこれに当たる。

③の場合が狭義の「敬意 (表現)」になる。これは敬意をもっているが、FTA 行為を行

わざるをえない場合、できるだけ相手の領域に踏み込まないで、相手との距離を置き、できるだけ押しつけることなく、FTA 行為を行うことである。この場合は相手の「消極的なフェース」に訴える「ネガティブ・ポライトネス」のストラテジーを使うことになる。上記の鉛筆を借りる例で言えば、聞き手に鉛筆を借りる懇願のジェスチャーをしたり、言語表現するなら Would you please lend me your pen? とか I would like to use your pen などとなるであろう。これは日本語で伝統的に言われている「敬意（表現）」に相当する。

小論では、この話し手から聞き手に対して、聞き手の「消極的なフェース」に向けられる「ネガティブ・ポライトネス」のうちの1つと考えられる「聞き手の脱焦点化」を扱う。

2. 聞き手の脱焦点化 (Addressee-defocusing)

2. 1 聞き手を消去

Shibatani (1985) では、受動態を一般化する概念として「主体の脱焦点化 (Agent-defocusing)」という概念を導入している。³⁾ これはタイポロジーで使用されている概念である。この概念で各種の受動態のみならず、受動態と関連する自発、可能、再帰代名詞構文、敬語、複数といった表現および構文と関連づけようと試みている。

この考え方を応用して「聞き手の脱焦点化 (Addressee-defocusing)」という概念を提案してみる。ここでいう「聞き手 (Addressee)」とはコミュニケーションに直接関わっている聞き手のことを指す。

広く多くの言語にわたって見られるのは、人間はコミュニケーションを行う際に、聞き手を直接指し示す語を避けようとしたり、またそのような語を使うことは「否定的なフェース」を侵害することになると考える傾向があることである。例えば、英語においては (2) のような文の場合、もっとも避けられるのは直接聞き手を指す you の呼称用法である。これは後述するように、人間の言語観が供えている「敬意を持っている上位の相手である聞き手に直接言及することを避ける」という言霊思想とも関連して考えることができる。

小論では (3) のように、話し手が、ある FTA 行為を想起した場合、そのゴールを満足させる方法のひとつとして、「聞き手を脱焦点化」することで、聞き手の「消極的なフェース」に訴える「ネガティブ・ポライトネス」というストラテジーをとり、ゴールである FTA 行為を行うと考える。

(2) Hey, {you/miss/lady} !

- (3) 話し手のある FTA 想起→ネガティブ・ポライトネス→聞き手の脱焦点化→話し手の欲求を満たす

この「聞き手の脱焦点化」はさまざまな形で具現化される。まず、第1に、聞き手の存在を発話の中から消去してしまう「聞き手の脱焦点化」が考えられる。

例えば、受動態がこれにあたる。それぞれ (4) と (5) の (a) と (b) の文を比べてみると、一般に (b) のタイプの文の方が、よりフォーマルな聞き手と距離を置いた表現形式だと考えられていることが説明可能となる。

(4a) We serve you dinner.

(4b) Dinner is served. (聞き手の脱焦点化)

(5a) You should return the key when you leave.

(5b) The key should be returned when leaving. (聞き手の脱焦点化)

また、この「聞き手の脱焦点化」は、聞き手が本来の聞き手 (Addressee) の場合だけでなく、「会話に直接参与していない聞き手 (bystander)」として会話の場に存在している場合も起こる。

例えば、パーティーの招待客 (guest) である Tom が、ホスト (host) の家のランプを誤って壊してしまい、片づけているところへ、事情を知らない女主人 (hostess) が加わる場面を想像してみたい。ホストが bystander である聞き手を考慮した場合、次の (6) ような会話が考えられる。ホストの a. と b. の表現をくらべてみると、当然、a. の表現の方が礼儀にかなった「ポライトな」表現である。この文では、主語で動作主 (agent) であり、bystander の Tom は、文の上では登場しない。花瓶の割れたのは自発的であるとするので、Tom の存在を消去しているのである。このように主体をまったく消し去ることで脱焦点化させることになり、「ポライトネス」を保っている。

(6)

Hostess : What happened ?

Host : {a. The lamp broke./b. He (Tom) broke the lamp.}

Guest (Tom) : I'm terribly sorry.

このように「聞き手の脱焦点化」の手段の一つとして、発話の中から addressee あるいは

は bystander としての聞き手の存在を消すことが考えられる。また (7) のタイプの it is ~非人称構文もこの手段を用いる表現のひとつと考えられる。

(7) It is required to return the key when leaving.

以上の分析を (8) のように定式化する。

(8) 聞き手の脱焦点化 (addressee-defocusing) →聞き手の存在を消す

2. 2 聞き手を不定化

「聞き手の脱焦点化」の2つめの方法は、聞き手を「不定化」して間接的に聞き手を指示する方法である。これは後で述べる聞き手を第3人称化するケースとも関連してくる。one の単数は特にアメリカ英語では非常にフォーマルな表現で、最近では you を使う傾向がある。

(8a) One is required to return the key. (聞き手の脱焦点化)

(8b) You should return the key.

(9a) One should be careful about one's/his investments.

(イギリス英語・フォーマルなアメリカ英語) (聞き手の脱焦点化)

(9b) One should be careful about your investments.

(9c) You should be careful about your investments.

以上の分析を (10) のように定式化する。

(10) 聞き手の脱焦点化 →聞き手を不定化する

2. 3 聞き手を第3人称化

聞き手の脱焦点化の3番目の方法として、(10) のように聞き手が会話の場にいるにもかかわらず、あるいは書き言葉においても聞き手を直接指すにも関わらず、you の代用として名詞(句)を使う方法がある。

(10a) The guests are required to return the room key to the reception.

(10b) The room key should be returned to the reception by the guest himself.

また、(11) のように、英語で定式化してしまった用法として、your Excellency, your Grace, your Honor などのように、聞き手を直接指し示す 2 人称をさげ、実際には目の前にいる聞き手を、その場に存在しないかのように、定式化された「抽象名詞」で指す用法がある。仮に「王室聞き手表現」と名付けておく。この用法は (12) のように呼称においても使われる。

(11) May I have your Highness' presence ?

(12) Your Highness, may I have your attention ?

このように、聞き手を脱焦点化するには、名詞を用いて第 3 人称に、あるいは会話の場にはいるが bystander としての聞き手に変えてしまう方法が考えられる。以上を定式化すると(13) のようになる。

(13) 聞き手の脱焦点化→聞き手を第 3 人称の名詞・抽象名詞に変える

2. 4 聞き手を複数化

ヨーロッパの多くの言語では、2 人称単数に「親称」「敬称」の 2 つがあることが知られている。前者は *t-* で始まる代名詞が多く、後者は *v-* で始まる代名詞が多いことから、この区別は T/V Distinction と呼ばれている。歴史的には、*v-* のタイプである複数の 2 人称代名詞が単数に転用された形になっている。また、この現象は、同一の祖語を持つ言語間にも波及したものでなくて、むしろ言語接触 (language contact) による「地域的な特徴 (areal feature)」だと考えられていて、全く異なる語族に属する言語にも現れる。現代の英語では T/V Distinction はなく、親称の *thou* は *you* に取って代わられている。

Brown & Gilman (1960) ではこの転用の由来を以下の (14) のように説明している。⁴⁾

(14) In the Latin of antiquity there was only *tu* in the singular. The plural *vos* as a form of address to one person was first directed to the emperor and there are several theories about how this may have come about. The use of the plural to the emperor began in the fourth century. By that time there were actually two emperors ; the ruler of the eastern empire had his seat in Constantinople and the ruler of the west sat in Rome. Because of diocletian's reforms the imperial office,

although vested in two men, was administratively unified. Words addressed to one man were, by implication, addressed to both.

転用を説明するものとして様々な説があるがと断わっているものの、この二人皇帝説に一番のスペースを割いている。

この説明は多くの点で不十分である。まず、第1に、なぜ偶然の歴史的事実が、多くの言語に影響を与えたのか不自然な説明しかできない。また2番目に、世界の多くの言語で、「複数」の概念と「ポライトネス」の概念が重なり合っている現象が見られることが説明できない。例えば、「敬意」と「複数」を表す形態素が同一であることが多く見られる事実なども説明できないことになる。

聞き手の脱焦点化という観点からみると、これは聞き手を単数から複数にすることで焦点を当てることを避けていることになる。「複数」と「ポライトネス」という本来は別々の概念が、聞き手の脱焦点化という概念で関連づけできる。

また、一般に聞き手を指示する用法や呼称の用法でも、単数よりも複数の方がよりポライトになる現象が観察される。⁹⁾

(15a) Lady/Boy! You dropped your ticket.

(15b) Ladies/Boys! You dropped your tickets.

(16a) Where are you going?

(16b) Where are you guys going?

以上の議論を(17)のように定式化する。

(17) 聞き手の脱焦点化→聞き手を複数形にする

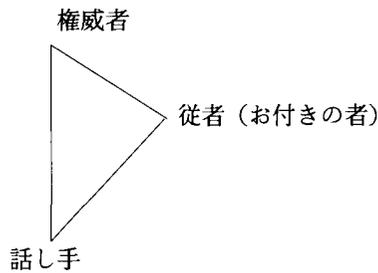
3. 「聞き手の脱焦点化 (addressee-defocusing)」のメカニズムと言霊思想

言霊思想は世界の文化に普遍的に見られる。聞き手の名前を直接呼んだり、所有物、身内の名前を呼ぶことが「タブー」であったり「ネガティブ・フェース」を犯す行為であったりすることが多い。

このような現象を説明する第一段階として、「聞き手の脱焦点化」の観点、とくに「複数」の概念から「言霊思想」を見直し、そのメカニズムに迫る仮説を探ってみる。上記のBrown & Gilman (1960)の説明にもある「2人の皇帝」との関係も含めて、非常な敬意

を払われる人に対しては、本来は直接口をきくことが困難であるメカニズムが存在すると思われる。(18)の図に示しているように、権威者にはそばに控える従者を通してのみコミュニケーションすることが許される。目下の者は、権威の象徴である者と直接話をする事は「ネガティブ・フェース」を犯すことになるので、権威者の従者を通して話すことになる。そのような場合、話し手は、従者(聞き手)とコミュニケーションを行っていても、常に背後にいる権威者を聞き手として意識してしまう可能性がある。このようなことから聞き手を指すのに複数形の代名詞を用いるメカニズムが潜んでいる。

(18)



このように観点から見ると、論理的には必然的な関係のない2つの概念、「複数」の概念と「敬意(ネガティブ・ポライトネス)」の概念とがどうして結び付きやすいの分かる。Brown & Gilman が主張しているように、ローマ帝国の分割により2人の皇帝が存在したことで「複数」の2人称代名詞が1人称代名詞に転用されたと考えるよりも、本来、聞き手を「複数化」することは「聞き手の脱焦点化」のひとつの手段であるということになる。「敬意」の用法の転移は「複数」の概念が内包しているメカニズムに従ったまでである。

4. まとめ

以上、「ネガティブ・ポライトネス」の根底には「ダイクシス」と「言霊思想」にもとづく、聞き手の存在を直接示さないという「脱焦点化」の考え方が潜んでおり、その方法には様々な手段があると考え、さまざまなネガティブ・ストラテジーを一般化できることを示した。社会語用論的な観点から見ると、「受動態」、「非人称構文」、「不定代名詞」、「代名詞の複数形」などは、「聞き手の脱焦点化」という目的を達成するさまざまな手段と考えられる。つまり、目的(means)―手段(ends)と考えると、「受動態」＝「聞き手の脱焦点化」で距離をおいたフォーマルな表現と考えるよりも、むしろ、「ネガティブ・ポライトネス」のひとつが「聞き手の脱焦点化」であり、その手段のひとつが「受動態」ということになる。上記の各節で論じたものを図式化すると以下ようになる。さらに考えられる手段もあるということでここで論じなかった「その他の手段」も加えている。

(19)

ネガティブ・ポライトネスの「聞き手の脱焦点化」

目的	手段	結果
聞き手の 脱焦点化	消去	→ 受け身 自動詞 非人称構文
	不定化	→ 不定代名詞
	複数化	→ 複数代名詞
	3人称化	→ 名詞表現 王室聞き手表現
	その他の手段	

注

- 1) 「もてなし表現」とか「待遇表現」とかいう訳語も考えられている。
- 2) 生田少子 (1997) p. 67.
- 3) Shibatani (1985)
- 4) Brown & Gilman (1960) p. 255.
- 5) 単数の Boy は、黒人に対する軽蔑的な呼称でもある。Frank & Anshen (1983) pp. 51-53.

参考文献

- Brown, R. & Gilman, A. (1960) The pronouns of power and solidarity. In Sebeok (Ed.). *Style in Language*. Cambridge: MIT University Press. pp. 253-276.
- Brown, P. & Levinson, S. (1987) *Politeness: some universals in language usage*. England: Cambridge University Press.
- Frank, F & Anshen, F. (1983) *Language and the sexes*. State University of New York Press.
- Goffman, E (1967) *Interaction ritual*. New York: Anchor Books.
- Grice, H. P. (1965) Logic and conversation. In Cole & Morgan, (Eds.) *Syntax and semantics 3: Speech Acts*. New York: Academic Press. pp. 41-58.

Shibatani, M. (1985) Paasives and related constructions : a prototype analysis.
Language 61. pp. 821-848.

生田少子 (1997) 「ポライトネスの理論」『月刊言語』Vol. 26. No. 6. 大修館.